

超低体重児 出産前に親に説明

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 138 》

総合周産期母子医療センターを備え、早産などの危険がある妊婦や超低出生体重児に対応する県立中央病院。本年度から、体重1000g未満と予測される早産児の親に対し、合併症のリスクや治療内容を出生前に説明する取り組み「プレネイタルビジット(出生前の訪問)」を始めた。出生後の親の不安を和らげ、前向きに育児をスタートできるように多職種チームでサポートする。

同病院では、県全体の出生数の約10%に当たる年間約700人の赤ちゃんが誕生。2016年は3割近い197人



笠井真祐子
産科部長

前向きな育児 チームで支援

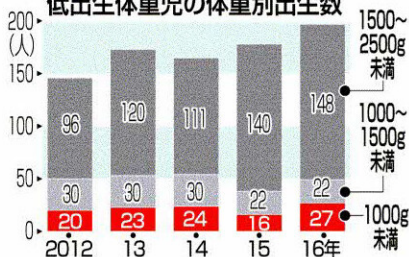
が体重2500g未満の低出生体重児、中でも27人は1000g未満の超低出生体重児だった。

産科部長の笠井真祐子医師によると、超低出生体重児は血管や臓器が未熟で、新生児呼吸窮迫症候群、動脈管開存症、腎不全、脳内出血などさまざまな合併症が起こりやすい。これまで出生後に治療方法とともに合併症の説明をしていたが、新生児の小ささへの驚き、チューブやモニターなど機器の多さへの不安、低体重で出産したことへの罪悪感などから、母親が

育児にマイナスな感情を抱いてしまうことがあったという。

そこで「口唇^{くちべい}口蓋裂^{くわいれつ}や心疾患、ダウン症などを対象に行ってきたプレネイタルビジットを、超低出生体重児と予測される親に対しても開始。産科・新生児科医師、助産師、看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカーらが関わり、赤ちゃんを良い状態で母胎から出す大切さや、人工呼吸器や保育器の必要性、赤ちゃんの発育や発達には両親の愛情が欠かせないことなどを伝えている。

県立中央病院における
低出生体重児の体重別出生数



これまでに6人に実施。笠井医師は「実際に治療に当たる新生児科の医師が具体的に説明することで、出生前から現実を受け止めやすいのではないか。多くのサポート体制に安心してもらえると思う」と期待。「分娩前の妊婦さんは気持ちも体調も変動が大きい。安心して育児につなげられるよう分娩環境を整えた」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します